

平成 22 年 6 月 14 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520427

研究課題名（和文） 英語における音声放出動詞の移動用法に対する語彙・構文論的分析

研究課題名（英文） A lexical-constructional approach to the motion use of verbs of sound emission in English

研究代表者

岩田 彩志 (IWATA SEIZI)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50232682

研究成果の概要（和文）：

英語における音声放出動詞の移動用法には、motion-describing タイプと motion-induced タイプの 2 種類があることが判明した。motion-describing タイプでは、動詞の表わす事象と移動事象の因果関係は移動様態動詞と根本的に同じである。一方 motion-induced タイプでは、経路が動詞の意味に含意されており、enter のような経路融合動詞と同じ特性を持つ。

研究成果の概要（英文）：

The motion use of verbs of sound emission (e.g. *The trolley rumbled through the tunnel*) turns out to have two types: motion-describing type and motion-induced type. The motion-describing type is essentially the same as manner-of-motion verbs like *roll*. By contrast, the motion-induced type behaves similarly to path-incorporating verbs like *enter*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：意味、項構造、語彙意味論、構文理論、語彙・構文論的アプローチ

1. 研究開始当初の背景

近年の語彙意味論において Goldberg

(1995)の提案している Construction Grammar (構文文法)による分析が大きな流れとなっている。しかし Goldberg の分析では構文の役割を強調するあまり、動詞自体の役割が過小評価されているきらいがある。Jackendoff (1990), Pinker (1989), Levin & Rappaport Hovav (1995)といった生成理論内での語彙意味論研究の知見をもうまく取り込めるように、理論を修正・発展させていく必要がある。

研究代表者は、このような観点から研究を進めてきた結果、従来の生成語彙意味論的分析とも、Goldberg 流の構文分析とも違う、語彙・構文論的分析という独自の理論を展開するに至っている。その成果は、隔年で開催されている国際構文理論学会で発表されている(2001年(バークレー、アメリカ合衆国), 2002年(ヘルシンキ、フィンランド), 2004年(マルセイユ、フランス), 2006年(東京、日本))。また Linguistics (2002), English Language and Linguistics (2004), Cognitive Linguistics (2005), Language Sciences (2006)といった海外の一流の学術雑誌にも論文が掲載され、海外の学者にも高く評価されている。

このような独自の理論の妥当性をさらに検証し、理論としてさらに発展させていくために、音声放出動詞の移動用法を次なる研究対象として選んだ。

## 2. 研究の目的

英語では音声放出動詞に経路を表す前置詞が続くと移動の意味を表すことが知られている(The car rumbled down the street.)。しかし音声放出動詞なら常に可能なわけでもない(\*John whistled down the street.)。また移動様態動詞では様態が移動を引き起こすと一般に言われている(The ball rolled down the hill.)のに対し、音声放出動詞で

は移動の結果、音声が出ることから因果関係において逆転していると言われている。

先行研究では、どちらかというと言声放出動詞の特異性が強調されてきた傾向があるが、やはり他の項構造現象と同じような原理・原則に従っているはずである。音声放出動詞の移動用法が結果構文や移動構文といった全体の体系の中でどのような位置を占めるか、といった視点を持ちながら個別の問題を解決していく。

## 3. 研究の方法

音声放出動詞の本質を解明するためには、大きく2つの作業が必要である。まずは音声放出動詞の移動用法自体についての詳細な分析。次にこの現象が結果構文や移動動詞の体系の中でどのように位置づけられるかの考察。

1つ目の作業をするために、先行文献(Levin & Rappaport Hovav 1995, 1996, Levin et al. 1997, Goldberg 1995, Goldberg & Jackendoff 2004, Talmy 2000等)を詳細に検討することは勿論、コーパスやペーパーバック、雑誌等からなるべく多くの用例を拾い出した。また2つ目の作業のために、やはり先行文献を基にしながら、結果構文や移動動詞の体系を明らかにすべく考察を進めていった。

## 4. 研究成果

### (1) 先行研究

英語では音声放出動詞の後に経路を表わす前置詞が続くと移動の意味を表わすことが知られている(The trolley rumbled through the tunnel)。主な先行研究として Levin & Rappaport Hovav (1995, 1996)と Goldberg & Jackendoff (2004)があるが、どちらの研究でも概略次のことが主張されてきている。(1) 移動の結果として音声が生じており、移動様態動詞(The ball rolled down the hill)の場合と因果関係が逆転する、(2) 人間の喉から発される音声の場合にはこの移動用法が不可能である(\*John whistled down the street)。

## (2) BNCによるデータ収集

British National Corpus を使って実際の英語の例を調べてみると、確かにこの2つの主張は大筋であたっているようである。しかし中には人間が喉から出す音声であっても移動を表わす用法が数例見つかった(Ma Bombie wheezed up the hill towards them./The cyclists groaned up the rocky path.)。またこれまで知られている例(The trolley rumbled through the tunnel)では、移動と音声放出が同時進行しているが、The plane thudded into the earth.のような例が見つかった。この例では、音の放出は飛行機が地面にぶつかった時点のみで起こっている。どうやら音声放出動詞の移動用法は一枚岩の現象でないらしいことが判明した。

## (3) 2種類の移動用法

更に考察を加えた結果、音声放出動詞の移動用法には2種類あると考えるべき結論に至った。これまで先行研究で取り上げられてきたThe trolley rumbled through the tunnelのような例では、移動事象と音声放出事象が同時進行するために、The trolley went through the tunnel + The trolley was rumbling while in motion という2つの文を足したもので言い換えられる。それに対してThe plane thudded into the earth は The plane went into the earth と The plane was thudding while in motion を足したもので言い換えできない。むしろ「飛行機が地面にぶつかる」ことと「thud という音声が生じる」こととは同じ事象の2つの側面であると考えられる。

実はこの2種類の区別と対応するものが、移動動詞に関して見つかった。The ball rolled down the hill という文において、移

動事象と roll する事象とが同時に進行している。そのため The ball went down the hill + The ball was rolling while in motion. で言い換えることが出来る。つまり、The trolley rumbled through the tunnel は roll のような移動様態動詞と同じということになる。違いは、roll が移動を特徴づける様態を表わしているのに対して、rumble は移動を特徴づける音声を表わしている、という点だけである。そこで The trolley rumbled through the tunnel のような用法は motion-describing タイプと呼ぶことにする。

では The plane thudded into the earth のタイプはどうか？ 実は経路を融合しているとされる動詞 (enter, cross, rise 等) が同じような特性を持っている。He entered through the front door は He went through the front door + He was entering while in motion で言い換えられない。正面のドアを通りすぎるのが、すなわち enter そのものだから、これは当然である。ここで through the front door という前置詞句は enter が語彙的に融合している経路をさらに詳しく指定する役目を果たしており、The ball rolled down the hill における前置詞句とは全く違う。そのため、His going through the front door constitutes his entering event という言い換えの方が正しく事実を反映している。これと同様に、The plane thudded into the earth は The plane's going into the earth constitutes its thudding event. と言い換えることが出来る。そして何かがどこかにぶつかなければ音が生じないわけだから、thudding event とは実は移動経路を内在的に含意していると考えることが出来る。すると into the earth という前置詞句は、thud という動詞が融合している経路をさらに詳しく指定する働きをしていることになり、

enter の場合と全く平行していることになる。この 2 番目のタイプは motion-induced タイプと呼ばれる。

#### (4) 先行研究の主張の再検討

ここで再び先行研究でなされている二つの主張に立ち戻ってみると、いずれも不十分であることが判明する。まず人間の喉から発される音声では移動用法が出来ないという主張に対して反例が見つかったことは既に上で述べた (Ma Bombie wheezed up the hill towards them. /The cyclists groaned up the rocky path.)。この反例では、実は音声が「苦労しながら登っていく」ことを伝えており、実質上は移動の様態と同じことになっている。そのため容認されると考えられる。つまり、motion-describing タイプは本質的に移動様態と同じであるために、このような反例をも許すのだ。

次に、motion-describing タイプと移動様態動詞では、動詞の表わす事象と移動事象との関係が逆転すると言われていたが、これも間違いである。The ball rolled down the hill のような例で、「移動様態が移動を引き起こす」というこれまでの考え方そのものに不備がある。移動様態とは移動があって初めて生じるものであるから、移動の結果として移動様態が引き起こされるはずである。こう考えれば、motion-describing タイプと移動様態動詞で何ら因果関係の逆転はないことになる。

更に言えば、移動の様態とは移動に付随するものであり、厳密には因果関係で捉えるべきではないとさえ言える。寧ろ、移動によって音声が放出される、というのは motion-induced タイプにこそ当てはまる描写である。

このように本研究では 2 種類のタイプを区

別することにより、先行研究での主張はどこが間違っているか、なぜ間違っていたか、を明らかにすることが出来た。そしてこの 2 種類の違いは、音声放出动詞に固有の特性でなく、移動動詞のシステム全般に関わるものである。一見不可思議に見える音声放出动詞の移動用法が、何ら特別なメカニズムを用いずに極めて理路整然と説明できたことになる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① IWATA, Seizi “A door that swings noiselessly open may creak shut: Internal motion and concurrent changes of state” *Linguistics*, 査読有, 46, 2008, 1049-1108.

[学会発表] (計 3 件)

- ① 岩田彩志 「way 構文ネットワーク再考」第 81 回日本英文学会、平成 21 年 5 月 31 日、東京大学駒場

- ② 岩田彩志 「動詞の意味はどのように文法に反映されるか? 構文分析と語彙テンプレート分析を巡って」 日本英語学会 平成20年11月16日 筑波大学

- ③ IWATA, Seizi “Another look at the maximal end-point constraint on resultatives” *Fifth International Conference on Construction Grammar*. 平成20年9月27日. University of Texas, Austin. USA.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

岩田 彩志 (IWATA SEIZI)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：50232682

##### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
なし ( )

研究者番号：